私の戦争体験

こどもの明るい未来のために

語り継ぎます

第9集

いずみ

特集号

●1987年6月

COOP

いずみ市民生協

大阪いずみ市民生活協同組合●堺市南花田口町2丁2番15号☎0722(32)3011●発行責任者／川島利雄●編集／機関紙委員会

地獄

森山　一男（美原西支部）

猛火に追われて…

次々と落下する焼夷弾で夜空は真赤に染まっていく。「北ノ方ガ燃エテルデ！」「アッ南モ燃エテキタデ！」人々が立ちすくむ間に、火は生き物の様にどんどん近づいてくる。

昭和二十年三月十三日夜半から始まったB29による大阪大空襲は、大阪人の誰もが予想し得なかった大きな被害をもたらしました。今まで聞いたこともない数多くのB29の轟音は、いつもと違う何かを感じさせました。

豈はからんや、地獄の序幕だったのです。「コリャ今日ハアカンデ」。逃げる機会を火勢の強さで逸した人達は防空壕へと走っていく。四十メートル程離れた所に防火用の貯水池があり、その周り三方に数ヵ所の壕が作られていたのです。火から逃がれるのにはここしかないと誰もが思ったのでしょう。

ともかく一番手前の壕にと入ってびっくり、中の方は満員、四人程の者は入口近くに坐る。火勢は普通の火事とは比べようもない激しさで、ムーとする熱風が壕の中まで漂ってくる。五分もしない内に壕から五～七メートル離れた家並みが火の海になる。恐ろしさに顔から血の気がひく。その白い顔が火の海に照らされて真赤に映る。

突然この壕に男の人が飛び込んで来た。血だらけである。「オッチャン、エライ血ヤデー」「ウン　頭ニ何カ当ッタラシイネン」。

何処の誰とも分らないまま、この人は二日後、焼けおちたこの壕の中で、入って来たその位置で、焼死体となって発見されました。この壕も安全じゃなかったのです。壕の支柱が熱と火で燃え出したのです。壕内を煙が充満してくる。

死んだ子供を背に…

「苦シイヨー」「目ガ痛イヨー」人々の声がする。壕の外は火攻め、内は煙攻め、勇を鼓して飛び出た人に続いて、一瞬火勢にたじろいだものの壕を飛び出しました。何処へ行く？そんな事全然頭の中になかったのです。苦しいから出ただけの私の目に入ったのは貯水池でした。二度程思いきりよくひっくり返りましたが、貯水池に飛び込みました（飛び出たり飛び込んだり、でもその時は無我夢中でした）。貯水池の中に多勢の人が居ました。炎に赤く照らし出されるその人達の顔。水の深さは背丈より少し深く、顔半分は水の中。時々はねたりして、縁の少し浅い方を探すのです。一向に衰える様子のない火勢、電柱が根元から倒れていく。燃えながら柱の様なものが飛んでくる。火の粉は吹雪の様に池の面に吹きつける。熱い、息苦しい、顔を水につける。

防空頭巾に火がつく、何回も水に漬ける。「ナムアイダ」…「ナムアイダ」と唱え続ける人の声も次々と弱くなり、いつしかそれも聞こえなくなり、やがてその人の姿も水の中に消えていきました。

乳飲み子を背負った母親も、身体中にふきつける火の粉と必死になって争っている。背中の子供はもうその時には顔を仰向けたまま生きてはいなかった。でも母親はそれを知らずに懸命だったのです。手を挙げ何かに掴まろうとして、そのまま水の中に消えていった人もいました。

これが夢だったら…

どんなに生きたく、苦しかった事だろう。見たものすべて地獄だった！

何時間経ったのだろう？　腕時計はガラスも針も無く、何の役にもたたない。火勢はやっと衰えた様子でしたが、地表はまだまだ熱く周囲は暗く感じました。今自分のいる位置が何処だかわからない位に焼けつくされたのです。

雨が降ってきました。黒い雨です。黒い雨でも熱い地表を少しは冷やしてくれた様です。

道頓堀川に浮かぶ筏が燃えています。市電が焼けて骨組みだけになっている。馬が死んでいる。男か女か判らない真黒な焼死体がある。此処迄来たが逃げきれなかった人だと思います。

余りにも激しい一夜の出来事は地獄でした。夢であってほしかった。多くの人達の死を見取った心の動揺は隠すべくもありませんでした。

焼け落ちた壕からは沢山の焼死体が掘り出されました。又貯水池からも多くの死体が引き上げられました。

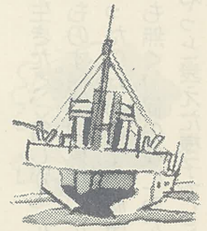
ドロドロに汚れ、火で方々焼け破れた着のみ着のまま、おまけに頭と顔半分火傷した自分の姿、何に見えたでしょうか……。

全滅に近い浪速区の一角で、死と隣り合わせだった当時十三歳の私にとって「唯、殺される側」であったあの時間は、生涯忘れ消される事のない戦争の一頁だと思っています。

救護の手ものびないままに…

戦争が奪ったもの

藤田　幸子（旭支部）



焼跡の中を学校へ…

去年の春、所用が有り本町に行きました。この地は私が子供の頃を過ごし、また、女学校のある所がなつかしくなり母校のあった方へ足を向けました。縦横に走る高速と立ち並ぶビルにまどわされて母校を見つける事は出来なかったけど、私の心眼に表れたのは戦後の焼野原の中に残って居る校舎やプールです。周囲をナンバの高島屋まで見とおせる焼跡、つき出ている水道管、こわれた鍋釜、とけてくっついた茶わん、夏の日をうけて扉を開けるとカンカンと鳴る金庫、中にはとけたアルミ貨、灰になっても一枚づつ数えられそうな印刷も見える紙幣。金庫の持主は、このくずれかけた灰のお金をどんな思いで置いて行ったのか。この辺の道は、木レンガを敷いてあり、その上にコールタールを流してあったので空襲の時には足元から燃え、多くの死者を出しました。半身焼けた体を防火用水につけて死んで居る人、燃えた体を消そうとしたのか川にはいって死んだ人が大勢おられました。

これら大勢の命と生活を奪った焼跡を、終戦後、軍需工場から学校にもどっても教科書を持たない私達女学生が毎日整理していました。今高速が走り、高いビルが空を蔽ふこの町の誰が四〇年前の悲惨な姿を、死んだ人達の事を知っているか。叫びたくなるのをおさえながら、車も電車もなく、ただ焼跡を黙々と歩いて学校に行き、焼跡の整理をしていた女学生達の姿を思いながら帰りました。

今も消えぬケロイド…

戦争につながる忘れられない場所は、数ヵ所あります。今もそこへ行くと、懐しさと共に、いやな記憶がもどり、現在の立派なビルや町に重なる様に当時の悲惨な破壊された町や死んだ人々が見えて来て四〇年前の出来事が私の中で生きつづけている。その中で一番いやな所は京橋です。今も環状線で通る度に鳥肌が立つ様な血の気が引く思いがします。

戦局のきびしくなった女学校二年の時、学徒動員で飛行機のベアリングを作る工場で働きました。天満にあるその工場でよく空襲にあい、火の海になった防空壕をのがれ別の壕へと逃げ回った事も何度か有り、電車の動かなくなった環状線の線路を歩いて家に帰ると母が、「北の空を見て今日はもう駄目かと思った。」と出迎えてくれた事も度々あり、当時の私達には明日も一時間後も解らない、いつ死んでもしかたないと言う悲しい想いを口には出さないけれども家族の間で通じていました。私も兄も空襲されやすい軍需工場に毎日ロボットの様に通っていました。兄は堺のダイセルで火薬を作ってましたが、焼夷弾でやけどをしました。服から出ている顔、足、首、手首を真赤になったホウタイに包まれている姿を見て驚きましたが、その時は病院に薬が無く赤チンをつけていたのです。やけども怪我も赤チン、それしか無かったのです。原爆で負傷された人達も同じだと思いますが、兄も今だにケロイドが残っています。

真白い制服が…

私の家は三月の空襲の後、近鉄沿線の長瀬に住んでました。近鉄は動いていたので鶴橋まで行けましたが、そこから天満まで線路の上を歩きます。電車ではなく、人の列が続きました。桜の宮の川の上は毎日歩いているのにこわかった。下の川が見えると足がすくみます。六月一日、夏の白い制服に着替えた日、大空襲が有り、夢中で鶴橋にたどり着いた時には白い夏服が真黒に変っていた。空襲の後にはかならず黒い雨が降った。ある日、線路も通れず空襲の後も生々しい源八橋を渡って帰った時、付近の被害はひどく、破壊された家や道ばたにある死体の中に、股からひき裂かれた青年の姿は今も私の脳裏に残っている。その様な極限の日々の中、あの森の宮の大空襲があった。線路伝いに折り重なる死体と、負傷してうなり声を上げている人達の間を、（今想うと考えられない事ですが、人間とはこわいもの、毎日死体を見ていると麻卑するんですネ）もうその頃には何の感情もわかず、それら死体を丸太棒の様に見て、よけながら歩きました。京橋の被害はひどかったけど、それも日常茶飯事、「又か」位にしか思ってなかった。その翌日、京橋を通った時、線路の下に大きな穴を掘り、そこに有る死体を手押し車で運んでは穴の中にほうり込んで焼いていました。その作業は数日続き、その辺を通ると死体を焼く臭いが何時迄も消えなかった。今でもそこを通ると臭う様に思います。

小学校六年の冬、十六年十二月八日に始まった大東亜戦争、森の宮に住んで居た私は数多くの友を失い母校も無くなってます。同窓会で級友に逢う度に、亡くなった友の話の後で「私達生きてて良かったネ」が挨拶になっています。女学校生活を戦争に奪われましたが、生きて来られただけで幸いと思い今年も平和行進ガンバリます。

あの狂った時代、戦争の為に亡くなられた友や多くの方々の御冥福を御祈り致します。

疎開先では、飢えやシラミに悩まされた

真実を語り、伝えねば…

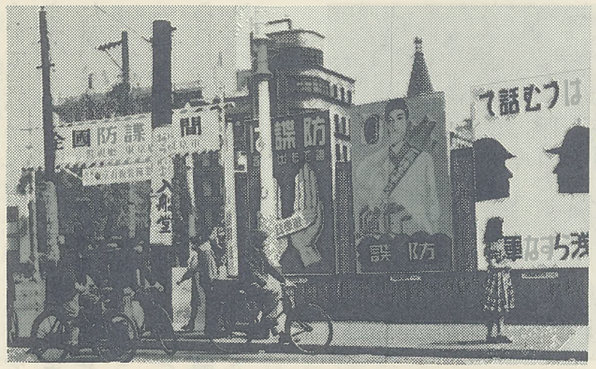
寺西　隆子（高石支部・室谷千枝子さんのお母さん）

母のぬくもり…

四十年の歳月をさかのぼれば、徐々にあの戦争の生々しい記憶が私の脳裏をかすめます。当時私は堺の元高田アルミニウム株式会社に勤務して居りました。戦闘機の翼に入れるタンクの部品を毎日黙々とつくっていた記憶がよみがえります。今にして思えば無意味なことをしていたとつくづく思われるのですが、戦争で物資はすべて配給制だし、身につけるもの、食べるもの何一つとして充分な物はなく、その日その日を懸命に生きて来ました。ただ、黙々と母がつくってくれたおべんとうを持って、満員電車にゆられ髪の毛も逆立つ思いで会社に着くのです。菜っ葉の一ぱい入った、お米はどこにござると言った様なおべんとう。でも、母のぬくもりと共にうれしくてたのしみの一つでした。同じ高石から通っておられた坂口さんというおじさんは時々「永山さん（私の旧姓）、おっちゃんの半分食べてくれるか」と大きな深いアルミのおべんとう箱を私の前においてくれるのです。私は自分のおべんとうを見られるのがはずかしいやらうれしいやらでよく戴いたものです。今思えば食べ盛りの私にふびんをかけて下さったのだと思います。今でもその事を思い出しては目がしらにつゆが光るのです。坂口さんのお家は百姓でお米に不自由はなかった様でした。

若く尊い命が…

或る日私達女子五十人程だったと思います。監督さんの号令のもと大和川の分工場へ行った日の事です。突然空襲警報が発令されあわてふためいて防空壕へ我れ先にとなだれ込んだのです。すさまじい爆音と共に艦載機が低空飛行したかと思うと、パラパラとものすごい音を立てて焼夷弾が落され、黄色く散らばったのやらジュージューと川にのまれたのやら、もう死ぬんだと皆んなで肩を抱き合った。一瞬、体



世間話も容易にできなかった…

の中に棒がつきささった様にかたくなった。こわい、もうだめだ。緊張の一ときが過ぎ、ようやく壕から出ても足が地につかずその場に身をすくめたものでした。後で聞いた事ですが、丁度大和川をはさんで対岸に川崎造船がありました。敵のねらいはそこだったそうです。その二日後に堺大空襲があったのです。今の堺駅が当時龍神駅と言った時分、駅のガード下にひなんした人々が重なり合って焼死していた事、川には焼けただれて川の水をのんだ真黒な死体がプカプカ浮いているのを見た時、この世の地ごくだと恐怖にふるえ上ったものでした。又戦地では片道だけの燃料をつんで神風特攻隊と呼ばれ敵地に散って逝った若者の事を思えば胸がはりさける様です。

尊い命を犠牲にしたのは、何だったのだろうか。戦争と言う傷あとをふんで今平和な世の中に身をおく安らぎこそ人間としての在り方ではないでしょうか。後日坂口さんを訪ねましたが、もう亡くなられて奥さんもこの地を去ったそうです。私の青春の一こまをかいま見、四十年の月日の流れに、いつしか戦争を忘れようとしている。忘れてはならないのです。次の世代に語り伝え二度とくり返さぬ様、平穏な日々のつづく事を祈りつつ真実めざし歩みつづける一人です。

戦中・戦後を生きて

海谷　都（八下支部）

すべてお国のため…

支那事変、満州事変の頃は、学校で日本は正しい戦争をしていると教えられ、幼ない私共は何のうたがいも持たず、何事もお国のためと、召集令状（赤紙）一枚で出征して行く兵隊さんを「おめでとうございます。頑張って下さい。銃後は私達で守ります」とお送りしました。又戦死した方を名誉の戦死と称えた時代でした。遺族の方にすれば、どんなにかつらく悲しいことだったでしょう。おおっぴらに泣くことも出来ない世の中でした。教育とは恐ろしいもので、純粋な私共若者は、それを当然のことの様に思っておりました。兵隊に行かない年輩の男性、又青年女子も徴用令状がきて軍需工場等へ動員されました。その頃親類のおじさんに、「この戦争は日本の敗けだ。隣国と戦争してはいけない」と口ぐせの様に言う人がいました。私共は、「おじさん、そんなこと言ったら非国民だ」と、学校で教わったことをそのままに言ったものでしたが、後になって、おじさんの言ったことは正しかったと感心したものです。言論の自由な世の中だったらあんな戦争は起らなかったろうに、大きな声で戦争反対など言うと投ごくされた時代でした。

大東亜戦争に突入して戦死する兵隊さんの数も増えて、私共は朝、召集令

状のきた兵隊さんを送り、午後は遺骨を迎えると言う様な日もあり、人口の少ない静かな村でも次々と、村葬が行なわれるようになりました。私達は出征兵士の家の田植の手伝をしたり、戦地向けの慰問袋を作ったり、赤十字病院へ傷病兵の慰問に行ったり、奉仕に行ったりしました。戦争がだんだんとはげしくなってくるにつれて、召集令状が来てもこっそりと見送りもなしに出かけねばなりませんでした。

終戦の前の年、昭和十九年私は結婚して大阪に居りました。アメリカの戦闘機B29が、毎日の様に一機とんで来て、爆弾を一つドカンと落し、とび去って行く様になりました。そのあとは家一軒位ふっとび大きな穴が開いておりました。私は一歳に満たない長女をつれて空襲警報のサイレンが鳴る度に防空壕へ避難する毎日でした。だんだんと回数が多くなり、夜も昼も空襲がある様になり、着のみ着のままで寝なければならない様になりました。衣類も食糧も不足し、食堂で雑水（ぞうすい）と言って、米や麦が少しに菜つぱ芋類等ドロドロに糊の様に煮込んだものが売られ、人々は行列をつくって一人茶椀一杯ずつ買っていました。成長盛りの子供の居る所は大へんでした。五人六人の子供に茶椀一つづつ持たせてそれを買い、その一杯が一回の食事です。私もとうとう子供をつれて、和歌山県山間部の実家に帰りました。時々会いに来る主人ともいつもこれが最後かもわからないと思っておりました。

あなたも大きくなったら…

あの大阪の大空襲、昭和二十年三月十三日、雲一つない美しい星空でした。私共の頭の上を、戦闘機が十数機づつ見事な編隊を組んで、次々ととんで行きます。南から北にむかって、そして翌る日大阪大空襲と言うニュースを聞きました。大阪に居る主人とは音信不通です。父は主人の安否を気遣って私に見に行って来る様に申しました。空襲から一週間目でした。電車は立錐の余地もない程の満員です。私共一般人は阪和線杉本町駅で降ろされました。夜になって住吉区の主人の居る会社の寮につき無事な姿に会えてお互ほっとしました。翌る日天王寺迄歩いて行きました。見渡す限り焼けただれて、所々に白壁の土蔵が黒くこげてポツンと残りくすぶっていました。この世の物とも思えない風景でした。

駅周辺や地下街には浮浪者や孤児が大ぜい居りました。主人が駅の改札口にいつも立っている幼い子供に、「何をしているの」と声をかけると、「お父さんを待っている」「お父さんどこへ行ったの」「戦争へ行った」「お母さんは」「死んだ」と、こんな子供をどうする力もないことはつらい。なんとかしなければと言っておりました。戦後四十二年、今日の様に物資があふれ戦争の跡も残らない平和な日を迎えようとは想像もできませんでした。あの様な悲惨な戦争は二度とあってはならないことです。この平和を守るために、私共戦中戦後を生きた者は戦争の恐ろしさ、悲惨さを子孫に伝えていかなければなりません。孫に戦争の恐ろしさを語り聞かせて、「あなたも大きくなったら戦争は絶対反対しなければならないのよ」と言いますと、幼ない孫は目に一杯涙をためて「絶対そうする」と言いました。

どうぞ世界中平和な世の中になってほしいと切に祈り願う者です。

忘れたい！けれど忘れてはいけない

七堂　義子（藤井寺南支部）

その日その日を…

「桜かざして生まれたる　我は日本の乙女なり」と昭和十六年四月に希望に胸をふくらませながら女学生となりました。しかしその喜びも束の間、その年の瀬も近づく十六年十二月八日第二次世界大戦が始まりました。制服も忽ちの内にかすり模様のモンペ姿に変り、日に日に全国民が戦争一色にぬりつぶされていきました。私達も学業を中断し、毎日毎日防空壕掘りや農耕作業、又出征兵士の留守宅へ田植えや稲刈りの手伝いに行きました。旱魃の激しかった夏、山あいのひび割れた田圃に下の池からバケツリレーで水を運んだ事もありました。戦争の激しさと共に私達も軍需工場へ出動しました。ハンダ付けなど初めての作業でしたけれど、唯その日その日生きているという実感を掴むのが精一杯でした。工場は河内天美でした。よく阿倍野方面から、風呂敷包み一つを肩にふらふらと、空襲によって家を焼かれた人達でしょう、歩いて逃げて来られたグループにも出逢いました。今でもその時の情況が脳裡に焼き付いております。勿論電車も空襲で止まりますし、いつ解除になるかわかりません。「歩いて帰れ」の命令で、私達も富田林まで畑伝いに小走りに南へ南へ歩いたものです。時々敵機が上空を飛んでくるのです。何度物陰や麦畑に身を伏せた事でしょう。飛行機の音が遠のくと、友達と手をとり合って無事を喜びました。当時あちこちで敵機が急降下して機銃掃射をしていたのです。

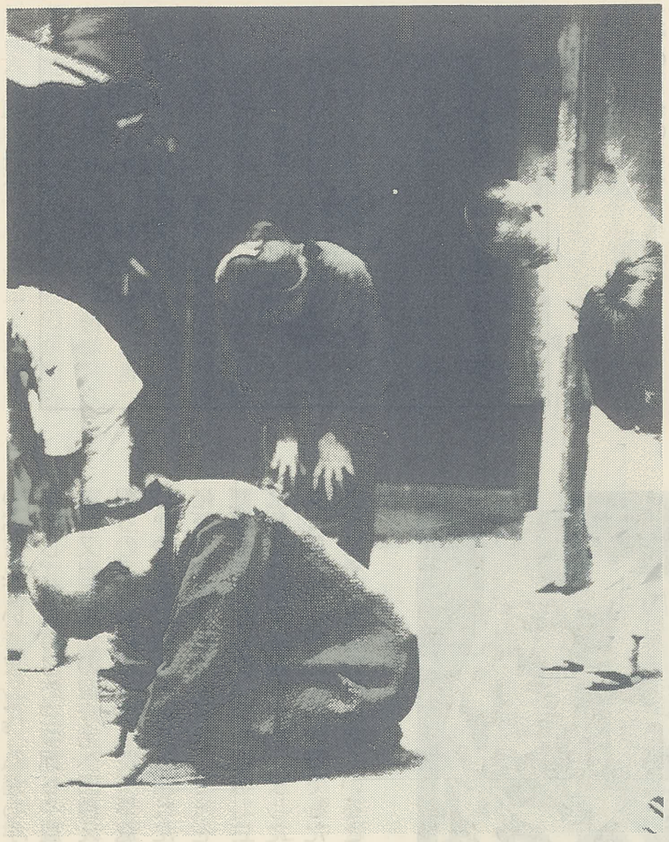
着る物を手に入れるのも大変だった

「自害しなさい…」

終局が近づくにつれ、毎日毎日空襲警報のない夜は殆んどありませんでした。その度に学校守備に走りました。うす暗い灯りの中で、今では想像もつかない食糧難の中で、どれだけ歯を食いしばって辛抱した事でしょう。人間、空腹になると何でもおいしく食べ

られるものです。さつまいものつるは勿論、ひえ、南瓜などを、一つまみのお米にかさを増やすためによく入れました。じゃがいも中位二個だけの時もよくありました。塩も岩塩とかで黒かったです。砂糖など見たくてもありません。サッカリンで甘味を補っていました。今にして思えば亡き母も十三人家族の三度三度の食事をどれだけ苦労したであろうかと、よく物々交換していた姿が思い出され胸が痛くなります。「ほしがりません、勝つまでは」「道なき道も歩け歩け」色々な標語が頭の中を駆け抜けていきました。

昭和二十年終戦間近になる頃、敵が本土上陸を目指しているという事で、私達も竹やり訓練を受けました。又先生から聞かされていました、「やるだけやって駄目だと思ったら自害しなさい」と。私達も当り前の様に感じていました。



終戦。だが、失ったものは戻らない…

電気つけてもええの…

昭和二十年八月十五日の終戦の日は、今でも鮮明に覚えております。「玉音があるから皆謹んで聞くように」といわれて、皆ラジオの前に集ったものです。皆虚脱状態でした。けれど「戦争はもう終ったのだ」それだけを確かめ合いながらほっとしたものでした。

あの戦争がもう少し長く続いていたら、もう再起は難しかったであろうと思います。「今晩からゆっくり電気をつけてええのやなあ」。今では普通の事がどれだけ有難く感じた事でしょう。広島、長崎の原爆を思うにつけても、私達生き残った者は、だんだんと増えてきている戦争を知らない人達に、「戦争は絶対にしてはいけない」と声を大にして訴えると共に、心から平和を呼びかけなければならない義務があると思います。

暗闇で飲んだ水

上山　保雄（本部職員・上山博さんのお父さん）

昭和十九年四月、私にも「赤紙」召集令状が来ました。当時、中国・天津市に住み、布綿の縫製工場で働いていました。一時、故郷和歌山に帰り、内地で召集を受けた者と共に大阪・天王寺に向かいました。（当時十九歳でした。召集を受けた者の中には、まだ二十歳にも満たない十五、六歳も居たように記憶しています。）

夜間、ひそかに軍用列車で下関へ。すし詰めの貨物船で釜山に到着しました。当時の満鉄（満州鉄道）に乗り十日間、朝鮮、満州をひた走り、天津の町を通過、張家口に到着。そこが私たちが軍隊として訓練を受ける場所となりました。ここは、四方城壁に囲まれ、何ヶ所にも歩哨が立つ敵国のまん中。六ヶ月間の訓練を受け、九二式重機関銃の四番射手として最前線に出発しました。行き先は誰にも知らされず、歩兵四中隊重機二ノ中隊砲兵（野砲）二千は万里の長城南端（南口）という小さな町に列車を降り立ちました。

戦友の死体を枕に…

十kgを超える機銃がずしりと肩にくい込む、わずかに配給された食糧だけがやけに軽く感じていた。徒歩で長城を越えると蒙古である。広い大陸の事、将介石の率いる正規軍との銃撃戦、また毛沢東の率いる八路軍の襲撃を受け、毎日が死との背中合わせである。ある時、敵襲を受け、雨の降りやんだ土手に身を隠していました。時々、パンパンと銃砲が近くに遠くに聞こえる。死への恐怖に喉がカラカラに乾く。水溜りの水を両手で掬い喉に通す。静かになった暗闇。ついウトウトと丸木を枕にごろ寝。ゆっくりと明ける朝は、昨日の銃撃戦が嘘のように明るい。眼を開けた私の眼に写ったものは、あっちこっちに丸太のようにころがる死体。私が枕にしていたのは硬直した死体の足。水溜りは、流れ出たどす黒い血溜り……。二番射手の戦友が敵弾を受け、即死。その戦友に、「弾、込め、弾、込め、おい宮崎」と、呼べど答えず。それから私は、戦争の恐しさ、死への恐怖を、ますます感じたのでした。

二十年七月、ソ連との交戦が始まった。家の様な大きな戦車が、食糧も尽きた、撃つ弾丸も無い私たちを襲う。戦車壕を掘り、前進を少しでも遅らせるしかない。ある者は、手榴弾を握ったまま、戦車に向う。目的の無い虚しい戦い。

八月、終戦を聞く。何千名の戦友が死に、負傷したこの戦いは、若い命と青春を奪いつくしてしまった。失ったものはあまりにも大きく、多く、二度とこの悲しみ、恐怖は、子供たちに味あわしたくありません。

愛する家族を失って

有田　春美（藤井寺南支部）

原爆のことは、小説でもない限り、ちょっとやそっとでは書けるものではありません。悲惨な思い出として、忘れようとしても、毎年八月六日が近づくと、いやでも思い出させてくれます。

当時、広島市内から近くの田舎へ疎開していました。昭和二十年八月六日は、夏休みというのに校庭で、男子は木刀、女子はナギナタで体力訓練をしていました。その時、飛行機が見え、ピカッと光り、白いキノコ雲があがってきたのです。音は記憶にないのですが、当時「ピカドン」といったくらいですから音があったのかもしれません。家に帰った頃、広島方面に爆弾が落ちたという情報が村中に伝わりました。

ボロボロの格好で…

広島市内には私の祖父・母の実家の親兄弟、その子供達がいました。心配しながらも連絡はとれず、ただ、イライラするうち、トラックで広島方面から、火傷や傷を受けた人達が避難してきたのです。その時、伯父が下は女性のスカート、上衣は破れたシャツ姿の乞食同然の格好で私達の疎開先へやってきたのです。会社内にいたので、火傷こそしておりませんが、ガスを吸っていたため体に異常が現われ、毛髪は抜け、体に斑点が出て、一ヵ月後に亡くなりました。

祖母と従兄弟二人は屋外にいたため火傷を負い、私達の疎開先よりも反対の方角に避難したのです。母も田舎のおじさんと一緒に広島へ探しに行きましたが、焼野原の中で簡単に見つかるものではありません。やっと会えたときは小学校の体育館の避難所で、祖母・従兄弟一人はすでに亡くなっておりました。

以上はほんの一つの出来事です。二度とこのような事が私達の身辺に起こらないことを願いつつ書かせてもらいました。

戦争っていやねえ

山内　富子（春木支部）

今年も又八月十五日終戦記念日が近づいてきた。戦後四十二年たって戦争を知らない人達が父や母になって子育

てをしている現在、平和が当り前になっている。家庭用品は電化時代、食物は豊富にある。私は昭和と共に生まれ育ってきた。昭和年号と同じ年である。

支那事変から始まって戦争ばかりだった。昭和十六年十二月八日未明、真珠湾攻撃から大へんな時代になる。若者は赤紙一枚の召集令状で軍隊へ入隊して、そのまま戦死した人達が多い。私のおじもビルマ方面で戦死した。いとこは東京の帝国大学（現在の東大）へ入学して間もなく学徒動員で軍隊へ入隊した。折角大学に入って勉強しようと思ってるのに、軍隊へいくのはいやだと涙を出してぼやいていたのを覚えている。その時はなんと非国民だろうと思ったが、今になれば彼の気持ちがよくわかる。彼は無事にいる。

「もうあかん」…

昭和二十年三月、B29の大阪大空襲、港区・大正区・此花区など海に近い区は全滅だ。この時私の家の二階の物干しにあがって見ていたのだが、焼夷弾が雨あられの如くふり、夜空を真赤に染めた光景が今でも脳裏からはなれない。六月の大空襲で大阪は全滅になった。八月になって私の町も爆弾でやられた。父が町会長をしていたので、父と二人で家に残って家族は全部別れ別れに疎開していた。空襲警報が鳴るたびに家の前の防空壕へ何度入ったことか。爆弾が落ちる度に「もうあかん」と何度も思った。食べるものもなく着のみ着ままの生活が何日つづいたことか、今考えたらぞっとする。よう生きてこられたと思う。

大阪も焼け野原に…（港区市岡元町付近）

八月になって私と父も、母や弟のいる四条畷のまだ奥の山の中へいくことにした。残っている道具を肩車にのせて私があとを押して父と二人、てくてくと歩いていく。

町や村を通り過ぎたら、その通ってきた町や村が焼夷弾が落ちて丸焼けになっている。途中何回も空襲にあいながら、朝出て夜まで歩いてやっとたどりついたふもとから、一つひとつ道具を運ぶ山のあい間に掘っ建て小屋のようなのがこれから住む私の家である。さあこれからが大へんな毎日である。食べるものは大豆の配給がバケツに一杯もらってあるので、毎日毎日大豆ばかり。お腹はとおって家族一同やせて骨と皮ばかりになった。山の中に敵か味方か知らないが飛行機がよく落ちてきた。山を切りひらいて畑なんかしたことのない父母がせっせと土をたがやしていた。私はちょいちょい、家までどんなようすか見にいったある日、京橋の駅に爆弾が落ちて、城東線と片町線の乗客が降りたとたんだったので、たくさんの人が死んだ。また弟が中学

生ながら学徒動員で、椿本チェーンの工場へ働きにいって山から通っていたが、ある日かえってきて「今日はこわかったよ。工場へ敵機がとってもたくさんやってきて地面すれすれのところまで降りてきて、機銃掃射でバンバンバンと友達がたくさん死んだよ」とこわそうに話をしていた。戦争って兵隊にいった人達でなく私達一人ひとり迄「勝つまではほしがりません」などをまともに受けて着のみ着のまま食べるものはなく過した八月終戦。

女はみなかくれろ…

九月になって焼け残った方の家へ家族一同八人がかえったが、これからが又大へん。アメリカの進駐軍が町を歩きまわって、女の人はみなかくれろと。今思ったら笑い話だがその時はまともにそう思ったものだ。店もぼつぼつ始めようと何もない中からやり出した。私の家の前にやみ市が立ち並んで、今思ったらようあんなもの売ってたと思うような品物ばかり。復員してきた兵隊さんがぞろぞろ歩き、みんなうつろな目で毎日毎日ただ生きているという顔だったように思う。心斉橋筋は焼け野原。天王寺から大阪駅迄の間も焼け野原、女学校の友達も散り散りばらばらになってしまった。幸い私は銀行へ勤めにいき、まあまあやっと落ちつきをとり戻した。高いお金でやみ米を買って、やっとお米のごはんをいただけるようになった。進駐軍が私の家にもやってきて、私の着物とサトウやチョコレート、お菓子などと替えてもらって食べたものだ。おかげで残っていた着物は全部お米と替えたりで一枚もなくなった。お金出してもなんにも買えない時代だった。そして新円に切り替えの前の日、旧のお金で百貨店へいったら、買うわ、買うわ、たくさんの人、人、一杯のみやも満員のありさま。

戦争が終っても飢えは続いた…

戦後の生き残った人達の生活がこれから始まる。私の家の職人さんも復員してきて支那の話をいろいろと聞かしてもらったが書くのはやめる。あまりにむごいからだ。戦争の傷痕は国民一人ひとり誰もがある。

あとで知ったのだが、広島と長崎に落ちた爆弾の話。本当に戦争はいやだ。しばらくは飛行機が空を飛ぶとB29を思い出してからだがびくついたものだ。国民一人ひとりが平和になれば世界中が平和になる。平和ってありがたいなあ。今現在は家中みな元気で病気一つしない我が家である。健康のおかげをいただいて、世の為、人の為にお役に立てばとがんばっています。

大阪大空襲

武田　キヌ（柏原支部）

それは四十二年前の大阪大空襲。今もあの日を忘れることは出来ません。

記憶をたどれば、当時共に話していた人々の顔や光景等がありありと思い浮んで来て悲しい思い出となりました。

当時私は、現在の梅田にある大阪中央病院（当時の大同病院）の一看護婦として青春の真唯中を病人の看護に当っておりました。当時の病院としては最新の設備をほこり、鉄筋五階建の立派なものでした。中庭をはさんで、私達の寄宿舎（これも鉄筋）が並んで建っていました。

職場では、近いうちに大阪に大空襲があるということが口々にささやかれて、毎日を恐怖の中で過していました。

一瞬のうちに火の海に…

そのうわさに反せず、遂に昭和二十年三月十三日の夜がきたのです。其の夜、私は病室勤務でした。何時頃だったか記憶しておりませんが、空襲警報のサイレンが鳴りひびきB29機の無気味な爆音が近づいてきました。近くで「ゴーと地ひびきと稲妻の様なものを感じたと思った瞬間、あたりがパッと明るくなった。その時あちこちで寄宿舎に焼夷弾が落ちて燃えている」と口々に叫んでいる声がしたのです。

寄宿舎には親元を離れてから四年間におふとんを始めとして生活必需品が一切そろえてありましたので、それ等の品物と今一つ二度と求めることの出来ない幼少の頃から娘時代のアルバムも空しく灰になってしまったのです。

病院の周囲は殆んど火の海で、病院の窓ガラスの割れ落ちる音がピンピンと聞える中を、担架をかついで外から入って来る煙の為に前方が見えなくなり、目がいたくて、水のある器をさがしてはタオルを浸しそれで目と鼻を被って外まで逃げました。当時の患者の数は街の中の危険をさけて一人二人へってゆき、身動き出来ない重症患者だけとなっていました。

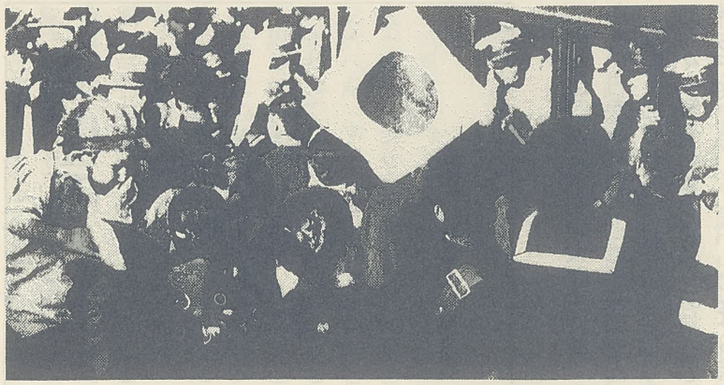
外へ連れ出して火の気のない安全な場所へ搬び出した時はもう夜明けに近い頃で、灰色の空にしょぼしょぼと冷たい雨が降っていました。

おにぎりと梅干に感激…

白衣もぬれて灰色によごれていました。寒さにふるえていても、着替える服とて何一つとして残っていません。焼跡から捨い集めた木片で、まだうす暗い夜明けの空にパチパチと燃えるたき火をかこんで衣を乾かしていました。もうつかれ果てて、誰一人ものを言う人もありません。その時私の名を呼んでかけつけて来たのは、外ならぬ母と姉でした。電車の線路も皆こわされて、途中空襲にあいながら夜中じゅう歩いてやっと尋ねて来たとの事、私

達はお互いに無事を喜び合いました。

早速持ってきてくれたおにぎりと梅干のあの味は、一生忘れる事が出来ません。友人の皆様と分け合ってたべました。その空襲が終って廃墟と化した梅田の街に度々艦載機が現れて屋上すれすれに飛来して機上の兵士が銃をかまえている姿が見えるくらいに低空飛行して、鉄筋の柱の蔭に身をひそめて勤務したものでした。父母は一日も早く勤めを止めて帰る様に説得に来ましたが、病院側としても重症患者が残っている以上なかなか止めさせてはくれません。当時では、もう誰もが今日一日の命はわからないものと知らぬ間に覚悟していた様な気がします。そんなわけで、「あー今日も一日無事に命があったね」――これが、人々の会話の一つだったのです。そんなうちにも日本の戦局も最悪を極め、遂に広島、長崎へと原爆が落されました。天皇陛下の玉音を聞き、長い長い戦争がやっと終った事を知りました。



敗色が濃くなるにつれて、少年兵の採用も増えていった

その時の感想はと問われれば、先ず第一に今からもうあの恐しい空襲が絶対にないのだと言ううれしさ、そして自分の兄をふくめて数多くの人々がどんな気持で戦地で死んで行ったか、又遺族の方々の気持等を考えると残念の一語にしかつきませんでした。

終戦後の病院は、病人は病室へ入れる限り入れ、あふれた人々は廊下にござを敷いて収容しなければとてもおっつかない有様で、人員は不足し夜を日についで看護に当りました。肉親と離ればなれになって身元も解らない病人、道路のそこここに食べるものがなくて行き倒れになっている人々、闇市でけんかをしてけがをした人等々、次々と運ばれて来て病院はさながら戦場の如き有様でした。

けれども、私達は一生懸命に働きつづけました。今思ってみれば、よくもまあ体がつづいたものと思います。それは、やはり若い力があったからです。

惜しみなく此の肉体をつかいこし
我が青春を悔いなく思う　キヌ

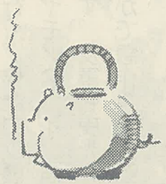
戦争を知らない今の子供達、又若い人達に、たとえ私の様な小さな体験にせよこれを後世に伝える事は大きな役割である様な気がします。現代の子供達の中には貧乏と言う言葉を知らない子がいると言うことを聞いておどろきました。

今や経済大国日本の現在かかえている諸問題――たとえば貿易摩擦、発展途上国の援助の問題、その他もろもろと問題をかかえ大変だと思いますが、何卒この様な戦争を再び繰り返さない様に、国としても世界の平和のためまい進されることを強く望むものです。

汚辱の戦い

ノモンハン事件参戦記

杉谷　辰男（津久野支部）



（前略）先日子供達から、親父の人生、特に子供等の知らない時代の出来事、私の生いたち、更にノモンハン事件の参加等について記録を残す様にとの申出があり、文才のない私がペンを取る事にした。戦後三十年経過し戦争を知らない子供達、いやもう立派に生長した、青年達に再度戦争の悲劇（私の場合は汚辱）を味あわしたくない。然し私この六日間の出来事が、体力の何倍かは、気力による事を体験し、事後私の人生に役立った事を付記する。

（中略）昭和五二年五月二十日記。（戦陣日記、原文のまま）。

七月三十一日　(月)　晴

愈々明日出発だ。内地の人達に便り出せないのが残念だ。然し戦友に出して戴く様にしたので何んとなく安心だ。夜中隊長殿以下全員会食する。中隊長殿が私を呼ばれ表彰上申の件、俺はやるぞ（勤務品行抜群のため班隊より一名代表として師団に表彰の上申さる）。

八月一日　(火)　晴

七時より軍装検査実施。最後に軍旗に別れの式が実施された。中隊長以下全員に見送られ一七時班隊を出発す。一年余り苦楽を共にした戦友と別れるのは何んとなく淋しい。戦友の目には涙が出ている。一七時四〇分訓戒駅に着く。國防婦人会の接待を受け、班隊長以下将兵に見送られ、一八時五〇分乗車開始。これが最後にと思うと何んとなく……一九時一〇分汽笛一声一年有余苦楽を共にした土地を離れる。戦友よ、さらば……

八月八日　(火)　晴

三時三〇分起床　ノモンハンに向って車輌にて出発。二里余り前進其の後は行軍だ。砲弾の音が聞える。空中戦が始まった。敵味方入り乱れての空中戦だ。友軍の高射砲がどんどん撃って居るがなかなか当らない。敵の砲弾が近くに炸裂した。愈々戦場に来た。何んとなく緊張してきた。然し皆元気なり。死は元より覚悟のうえだ。敵の砲弾何人か、何んのそのドントコイ。俺達の休んで居る百米前方で気球が上った。一同驚いた敵機が飛んで居る一同危いと思って見ていると突然気球が降りて来た。すると東方より飛行機三機飛んで来た。友軍機と思って居ると我々が休んで居る附近から重機が撃ちだした。オヤッ敵機かと思った瞬間敵機が低空し機上から撃ち出した。ものすごい。初めて見た空襲だ。然し我々一同無事だった。飯を焚きだしたが、水が無い汚い水を取りやいだ。実に水の有難みが知れる様だ。飯が焚けた。しばらく休む。須見部隊の軍旗を拝す。聯隊長の訓示有。我々三年兵に期待する事多しとの事。光輝ある軍旗に対し

ても我々一同一死報國御奉公に邁進せねばならない。明日各中隊に配属される。今夜は聯隊本部の壕で寝る事になった。

砲弾の音が聞える……

八月十九日　(土)　晴～雨

今日は久しぶりに洗濯した。半月余り入浴せんせいかアカで真黒だ。ハダカで洗濯して居た上空を敵機が飛んで居る。友軍の高射砲が撃ち出した。チョットこの風景は内地の兵隊さん達には見られぬ事だ。砲弾の炸裂がモノスゴイ……今夜も〇〇作業に行かなければならない。三時頃から又雨になった。一日天気だと又雨だ内地の梅雨の様だ……夜作業に行く。作業中夜襲を受ける（敵機）イヤモノスゴイ。照明弾を落し爆弾を落す。友軍も曳光弾を撃つ其のスゴイなかで急作業を実証し無事に帰隊する。

八月二十五日　(金)　晴

昨日より引続き警戒につく敵兵の姿がありありと見える。朝からまた砲弾が撃ち出された……食物がなくなった。副食物がないだけで米があるので何んか力強い。然し煙を上げる事が出来ないので炊く事が出来ない。今日一日中飯を喰う事が出来ないようだ。

『分隊長として兵を指揮しながら射撃中、迫撃砲弾にやられる。午前九時頃、それから数時間後、小板班長に壕から助け出され逃げる途中、小板班長砲弾で足をやられ、又俺を助け様として、大宮一等兵手をヤラレル。其の間物凄い砲弾の中、山県部隊の位置迄下る。

八月二十九日　(火)

夜部隊と共に下る。途中敵に発見され、戦車に追われ、戦友達大部分、ヤラレル。途中迄小板班長と行動を共にして居りしが、別れてしまう。午後三時野線病院迄辿りつく。小隊長にも会う……当夜出発ハイラル陸軍病院に向う。

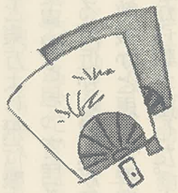
八月三十日　(水)

午後四時無事に着く。皆と別れ別れになった。

何んとなく淋しいがしかたがない。何百名の戦傷者　当夜は病院に寝る。満員だ。病院生活第一日』

『　』は負傷後　ハイラル陸軍病院にて　左手で書く

空襲



岡野　和子（玉手山支部）

疲れた夜は今になっても、グラマンに追いかけられ機銃掃射をあびている夢をみるのです。それだけ強烈に心に刻まれているのでしょう。

今から四十三年前、私は愛知第一師範学校の生徒でした。学校は名古屋市の西区、中心部より少し離れたところにありました。

敗戦の年、昭和二十年に入ると夜と

B29の焼夷弾にも対抗できると、だれもが信じさせられていた…

なく昼となく、空襲警報が鳴りっぱなしで、ひとときも心の休まる時はありませんでした。

警報が鳴り終わらない間に、空を見上げるとB29が大編隊で来襲です。飛行機が点にみえるほど、それだけ高度が高く、飛行機雲を長くひいて悠々と飛んでいるのです。それが、五機や十機ではありません。それはそれは、数え切れない数だったのです。

ちょうど学校の上が方向を変える位置だったのでしょうか。下から見ていると直角に曲っているかのように見えました。爆弾投下、機首に黒い煙がもやもやと出ると、黒ごまのようなものが一斉にふき出して轟音と共に斜に落ちていくのです。B29の高度が高すぎて、高射砲からいくらうっても当るはずがありませんでした。手の施しようもなく、ただ、ぼう然と見守るだけでした。

当時、大曽根（オオゾネ）には、巨大な三本煙突がそびえ立ち、航空機を造る大工場がありましたので、B29の集中攻撃を受けたのです。

奈良県から、たくさんの中学生が工場に動員されてきていました。雨、あられと落ちてくる爆弾の犠牲になって大勢死んでいきました。今、考えられないような工場内退避だったのです。

一夜にして焼土に…

三月十二日だったと思います。東京についで夜間大空襲がありました。それまでは、夜間は、一機ずつ波状的に入ってきたのですが、この夜は、大編隊を組んできて、名古屋市の中心部をねらいました。一夜にして焼土と化し、逃げ場を失った人達が、黒こげになって死んでいきました。それは、それは、この世の地獄だったのです。

夜間空襲には照明弾を使いました。火の玉のようなものが、校舎の屋根の上に一列に並ぶと、あたり一面、月夜よりも、もっと明るく、不気味な光を放って照らし出すのです。防空壕の中に入っていても、みんなの顔がはっきりと見えて、じっとしてはいられない気持ちにさせたのです。

始めに侵入した一機が、照明弾を投下して目的地を確認しておいて、次からの飛行機が爆弾攻撃をしていったのです。群がって逃げまどう人達の上から爆弾投下、もう、一秒さきの命が保障されない戦場だったのです。

私の学校も、六月に入ってから、朝からの大空襲で焼けてしまいました。この日は、残っているところを油脂焼夷弾で焼きつくしてしまったのです。電車の停留所、押切から天神山までの一区間、校舎が立ち並んでいました。

幼稚園、小学校、女学校、師範学校、その他いくつかの附属校が一ヵ所に集っていて、その中に学生寮もありました。広い運動場の周りには、ポプラの木々が空高くそびえ立ち、学生たちの憩の場所でした。それらが一瞬にして焼け野原になってしまったのです。

その日から、工場から帰ってくるとすぐに焼け跡の整理です。焼夷弾の筒を集めると一千個余り、これだけの数が、ところ狭しと落ちてくるのですから——。

これら科学戦に対してバケツリレーとか、火消しなわでたたくとか、手押しポンプとかを使って猛訓練しても、到底立ち打ち出来るものではないのです。当時は、これしか対応のしかたがなかったのです。

現在の核戦争の恐しさを、もう二度と被爆者を出さないよう、被爆の悲惨さと、平和への願いを戦争体験を話すことで訴え続けなければならないのです。

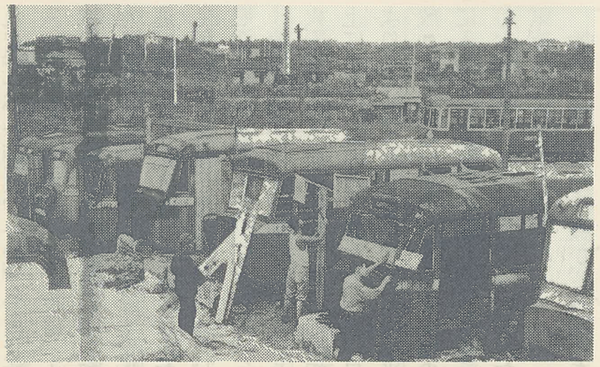
戦争の傷あとは癒えず

白井　巌（志紀支所職員・白井康裕さんのお父さん）

昭和二十年にはいると日本は、敗戦に向かって坂を転がり下り勢いが、一層早まった年でした。

海軍で航空魚雷の整備に従事していた私は、攻撃機が飛べない状態になってくると、明けても暮れても巨大な防空壕掘りと、本土決戦に備えての肉弾攻撃の演習に走りまわっていました。

二年前に健康いっぱいの体で海軍に入ってから、厳しい軍隊生活にも体は馴れてきているとばかり思っていました。ところが、毎日の日課に精力的に励んでいた体が、この春先になると急激に気だるさを覚えはじめてきたのです。いちど軍医官の診察を受けたいと思いながらも、疲れるとか体がだるい位では休みをとる事もできず、受診の許可を上官にうける事も困難な状態になっていました。それというのも「肉体の不調は精神力の欠けている証拠である」という一言で、すべての事が片ずけられているからでした。



空襲に家を焼かれたものは、古いバスや電車に住んだりした

兵器は勿論のこと、戦争物資や日常の食糧にも欠乏してくると、増々精神主義をふりまわして、最後は特攻精神を事々に煽りたてるようになってくると、人間の生命はいとも簡単に見捨てられるようになってきました。

春先から二ヵ月位は、私の体もなんとか平静を保っているかにみえましたが、梅雨どきは夜ごと激しい咳と寝汗で眠れず、ついに周囲が騒ぎはじめて病室へ連れていかれました。診療もそこそこに、隔離病室に閉じこめられてから、左の肺は完全に結核に冒されて、ピンポン玉ぐらいの空洞が見られるという無惨なものでした。

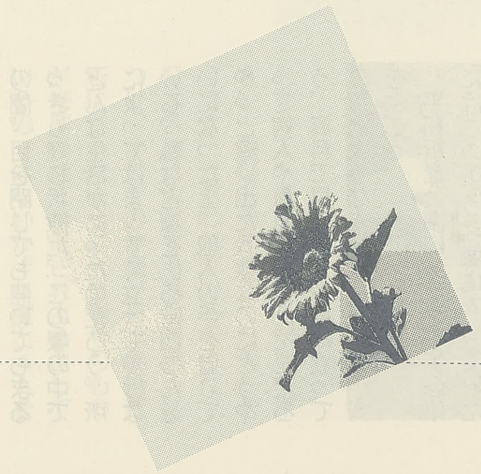
戦後も続いた入院生活は十年間にわたり、二十歳代は死と背中合せの闘病生活に苦しみました。左肺は整形手術によって肺活量は半分以下の生活が、戦争のいまわしい後遺症を背おった毎日となっています。

戦争は悲惨です。どんな事をしても戦争は避けるべきだと思い続けております。

雲に寄す

上村　肇

街の上を一団の雲が流れている
葡萄色の色彩をしているから
たぶんオランダあたりからきたのであろう
雲よ　お前は知っているか
十年ばかり前に
この街の上空を
まぶたを泣き腫らし
血を滴らせて
わたって行った一団の
大いなる雲のあったことを
雲よ　行き交う多くの雲に告げてくれ
灼熱の太陽に　赤い眼帯をかけ
蛆さえぼとぼとと落として行った
あの血に汚れた　あの日の
あの雲の流れは御免だと
雲よ
立ちあがる雲よ
ぶどういろの雲よ
いつもきょうの日のような
うつくしい雲であってくれ



（昨者は長崎県諫早市在住の詩人で、八月九日の長崎の原爆禍をしのんでいる）

命は宝（ぬちどうたから）

時岡　澄子
藤井寺南支部

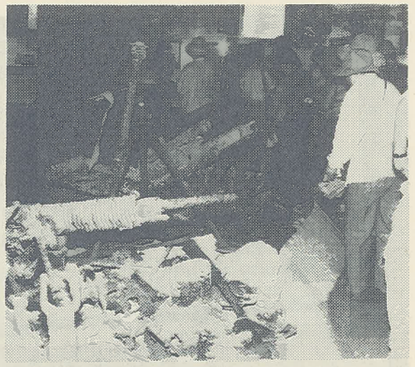
昨年夏、日生協主催の沖縄戦跡・基地めぐりに参加させてもらった。那覇空港に着陸する時、まず目につくのが自衛隊機である。横っ腹に日の丸をつけた戦闘機がずらっと並んでいるのを目前にすると何かドキッとする。バスで移動する間にも真黒で窓のない飛行機（KC135空中給油機）や機体の上に円盤型のものをくっつけた飛行機（E3Aセンチュリー空中警戒管制機）など見たことのないような飛行機がすさまじい音で飛んでいて「ああ、基地の街だな」と思い知らされる。

着いた日の夜、学習会があって〝未来への証言〟という五〇分のフィルムを見た。沖縄戦がいかに悲戦な戦いだったか、誰が誰のために、又、誰と誰の戦いだったのか。フィルムの一コマ一コマに涙が溢れるのを押えようもなく時には思わず目をつぶってしまったこともあった。沖縄県民生協の理事さんが「今夜こそはきっちり見ようと決心していたのですが。どうしても目をつぶってしまうのです」と涙の目で挨拶されたのが印象に深い。

珊瑚礁の美しいこの島々にはたくさんの鐘乳洞があり人々の避難壕に変わった。負傷兵を収容した病院壕も多くあった。その内の糸数壕とチビチリガマ（壕のことをガマと呼ぶ）を見学した。懐中電灯を頼りにそろりそろりと歩いて行くとベッドの残骸、釜の跡、爆風よけの石壁等、又、茶色に変色した人骨、入歯、国民服のボタンが散在し戦争がそのまま残って居た。見学が済んで黙とうを捧げるため全員が懐中電灯を消した時の闇は忘れられない。文字通り漆黒の闇。目を閉じても開いてもまるっきり同じ状態だ。この壕の中でどんな生活があったのだろう。所によってはまっすぐ立って歩けないし、私など壕を出る時四つん這いになった上、他人の手を借りてやっと這い出た状態なのにどうやって病人や負傷兵を運んだんだろう。資料で見るより現場に立ってみるとよりなまなましいものが胸をよぎる。

平和祈念公園にある平和祈念館にはこのような壕に入っていた人、集団自決で死ねなかった人達の体験が書かれた大きなノートが展示してある「証言の部屋」がある。そのノート一冊一冊には死ねなかったために余計つらい毎日を生きてこられた人達がようやく語られた真実の証言が記されている。死ぬまでかくし通したかった心の痛みを血を吐く思いで白日のもとにさらされたのはだんだんきな臭くなる世情を見ていて〝今、黙っていては〟という強い危機感を持たれたからだと聞く。戦争の残酷さを知るためにも多くの人に読んで欲しい。

沖縄戦の特長の一つに死亡者が軍人より民間人の方がはるかに多かったことがあげられる。軍・民一体で滑走路等の軍事施設をつくったこともあって秘密保持という点でどうしても捕虜になられると困る事情が軍にあった。だからこそ米兵の恐しさが誇張され捕虜になる位なら死を選ぶという教育が徹底された。その結果〝集団自決〟という信じられない集団虐殺が決行された。〝愛する人程確実に殺した〟と言われている。母親が幼ない我が子を！子供が親を！夫が妻を！。守ってくれるべき軍人に殺された民間人も多く居た。スパイ容疑でリンチされて、より安全な避難壕を追い出されて等々。この事実はヤマトンチウ（日本人）の一人として負いつづけねばならない大きな十字架だと心が重い。



摩文仁ノ丘（マブニ）には沖縄戦を美化するような各県の碑が建ち並び観光名所になっているようだし、加えて魂魄の塔や嘉数の丘は自衛隊の作戦実習の場になっている。基地の広大さ、どんどん発達している様々な戦略機が自由に飛び交う空、住宅のすぐ近くにある射爆場。二四時間体制でアンテナを張る軍事通信基地、沖縄県民は今もなお様々な危機にさらされながら生きておられる。

今、沖縄では広島の原爆碑文をもじって「安らかに眠らないで下さい。再びあやまちをくり返しそうです」と言われているそうだ。日本各地に点在する基地を思うにつけ、かつての沖縄が日本の捨て石にされたように今日本そのものが米国の捨て石にされようとしているのではないか。二度と〝人を殺すを誉れとは〟などと嘆かなくてもよいように、子供達に戦争のない世を残すために私達一人ひとりが何かをしなければいけないと思う。

最後に平和祈念資料館・結びの言葉を転記します。

沖縄戦の実相にふれるたびに
戦争というものは
これほど残忍で　これほど汚辱に
まみれたものはないと思うのです。

このなまなましい体験の前では
いかなる人でも
戦争を肯定し美化することは　で
きないはずです。

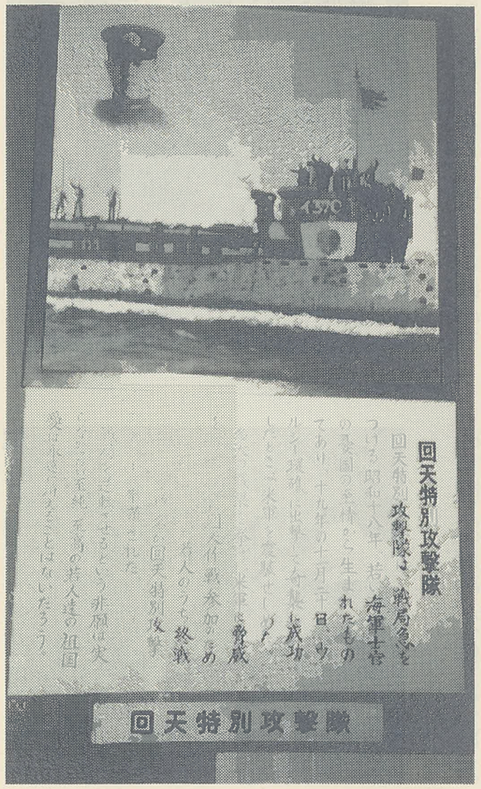
戦争をおこすのは　たしかに　人
間です
しかし　それ以上に
戦争を許さない努力のできるのも
私たち　人間ではないでしょうか

戦後このかた　私たちは
あらゆる戦争を憎み
平和な島を建設せねば　と思いつ
づけてきました
これが
あまりにも大きすぎた代償を払っ
て得た
ゆずることのできない
私たちの信条なのです。

回天（人間魚雷）発射基地跡に思う

並河　匡彦
春日丘支部

新幹線徳山駅南口近くの、大津島巡航船乗り場から約四〇分船に乗ると、馬島に着く。そこは旧海軍魚雷発射試験場があった所で、第二次大戦末期の昭和十九年九月には、人間魚雷として知られる、回転特別攻撃隊の出撃基地になった所である。



今年五月、徳山の裁判所に出向いた際、「回天発射場跡も現存し、回天記念館もある」ことを聞き、時間の都合をつけて訪ねてみることにした。

今は何の変哲もない魚村の船着場から約一〇分も歩くと、左右に分かれた道があり、左側に進むと古びた、処々に割れ目や窪みが出来ているコンクリートの長いトンネルに行き着く。島の東側から西側を横断しているもので、ここを通り抜けると、目の前に切りたった崖から深い海中に突き出ている回天発射場跡が現われる。

海面上は二階、海面下に二本の回天発射場をもつコンクリートの特攻基地である。コンクリートの床は随所が陥没し、深淵な海中が足の下にのぞける。透明な水底は深く不気味であり、人間魚雷に乗り込んだ特攻隊員の思いが込められているようである。

累計一四四人の、出撃したまま帰らない若者の事を思うと、悲痛な、いたたまれない気持に襲われ、荒廃し変色したコンクリートが一層それをつのらせる。

かつては、回天や、若者を幾度も幾度も運んだ時期のことを想起しながら、再び長いトンネルを引き返し、次は分岐点から右側の山の手を一〇分程登ると、旧兵舎跡地に新しく回天記念館が設立されている。

外門を入ると記念館に行きつく迄の道の両側には、人間魚雷となって死んで行った一人一人の石碑が並んでいる。記念館の入口の右横に、全長十数メートル、先端に起爆装置と爆薬を詰め、中央に人間が乗り込み操縦する、回天の実物がそのまま置かれている。

記念館の中には特攻隊員の遺品約一〇〇〇点が展示されている。隊員の制服、制帽、日の丸の寄せ書、短剣、革帯などに、七生報国、轟沈、必殺などの書き置きや、思いをこめて綴った遺書などがある。これらには、軍国主義教育をたたき込まれ、天皇や国家の為に死ぬことだけが生きがいであると、された、二〇歳前後の若者の心情が示されている。ここには広島や長崎、沖縄の資料館と異った、別の戦争被害者の姿がある。戦争の非道、残虐さを身をもって告発しているのである。

しかし、この記念館の設立者が、海軍と特攻隊員への賛美に向かせようとしているように思われるのは、厳しく批判しなくてはなるまい。

人類の知性に対する、狂気による反逆を許す訳にはいかない。これこそが、これらの若者を今に生かす道なのだと思う。

瀬戸内海に浮かぶ小島の陰で、今も戦争の重大な責任を問い続けていることを感じながら、感慨を込めて帰路に着いた。

「あのころはフリードリヒがいた」を読んで

溝田　真元
津久野支部／中三

はじめ、しぶしぶ読んだけれども、読んでいくにつれて当時のユダヤ人に生まれたがために、迫害されたフリードリヒがとてもかわいそうに思い、それと同時に『なぜ、迫害したのか?』とも思った。理由がわかったときには、ヒトラーは、人間は、戦争はこわいと思った。

フリードリヒは、迫害されて殺されてしまった。フリードリヒだけでなく多くのユダヤ人が迫害されて殺された。それは結局戦争が悪く、こういう事を二度とおこさないためにも戦争はおこしたり、できる状態にはしてはいけないと強く思った。

映画「ムッちゃんの詩」を観て

佐藤友美子
松原中央支部／中三

この原作を小学生の時読んだことがあったけれど、やっぱり何回見ても泣きそうになってしまっていた。だから映画となると、もっともっと泣きそうになってしまいました。

この話でかわいそうな人はムッちゃんだけでなく、朝鮮からむりやり連れてこられた金さん、父母をなくした正ちゃん、ムッちゃんの義姉さんなど、たくさんいてたと思います。この他にも、日本の人、アメリカの人、戦時中に生きている人で、幸福な人は一般の人の中にはいないと思います。

一番印象に残ったのは、やっぱり金さんが最後に言った「ムッちゃんを殺したのは、おまえたちだ」でした。もし私があの時代に生きていたなら、きっとムッちゃんを死においやったかもしれないし、きっと見てみぬふりをしてたと思います。そして、人々が人でなくなるような心になる戦争のおそろしさも、改めて知らされました。

「自分の事で精いっぱいだから」と、この一言でかたづけようとした、あのおじさんの気持ちもそれなりによくわかりますが、やっぱりそういうところが、私には戦争を体験していないため考えがあまいと思います。そして、戦争のために親や子をなくした人の悲しさなんかもわかったような感じがします。今、もし戦争になったら、ああいうふうにはならずに、一瞬のうちに皆、死んでしまうと思うと、やっぱり戦争に反対しなければいけないと思いました。

とてもよい勉強になった映画でした。

短歌

亡き戦友の眠れる山河青春を埋めしビルマに飛び発ちぬ夫は

訪ねゆきて亡戦友と語らむ三五年の思ひを遂ぐる夫を思へり

何しにと問う孫の瞳に巡拝を説きつつ念ず戦争あらしむな

山中たい子
西舌鳥支部

俳句

春の空不安横切る飛行雲

母の日の母は炎の中にいて

掃除機へ八月の雲吸い込まる

冬空や岬の墓は兵ばかり

生命ありて今語り継ぐ戦争展

亀田　光子
（津久野支部・野田
繁美さんのお母さん）